

東京文化財研究所主催

シンポジウム「黒田清輝、その研究と評価の現在——没後 100 年を機に」



黒田清輝《湖畔》 1897（明治 30）年 東京国立博物館蔵

“日本近代洋画の父”と称される洋画家の黒田清輝（1866～1924）が没して、本年は 100 年という節目の年となります。これを記念し、鹿児島市立美術館で回顧展、東京国立博物館で特集展示が催されますが、黒田がその創設に大きく与った東京文化財研究所では、「黒田清輝、その研究と評価の現在」と題してシンポジウムを開催いたします。

黒田清輝は、多くの日本人にとって馴染みの深い画家のひとりでしょう。中学や高校で使う歴史の教科書には、必ずと言ってよいほど《湖畔》が掲載され、黒田が明るい色彩による画風で好評を博し、後進の画家に大きな影響を与えたことが記されています。

その一方で、黒田が西洋美術のアカデミズムを日本へもたらそうと努めたことも、美術史研究者にはよく知られています。東京美術学校西洋画科で教鞭を執った黒田は、人物画を美術の基本に据え、人体デッサンを日本の美術教育に根付かせました。自らも群像によるコンポジションを試みた《昔語り》や、裸体画に抽象的な意味あいをこめた《智・感・情》を制作しています。

このように功績が多岐にわたる黒田清輝をめぐるのは、様々な側面から注目されてきましたが、その評価もまた多面的です。黒田清輝は日本の美術に一体何をもたらしたのか？——本シンポジウムでは、これまでの黒田をめぐる語りを俯瞰した上で、最新の研究成果をふまえながら、あらためてその日本の美術史における位置を問う場としたいと思います。

開催日時：2025 年 1 月 10 日（金） 13：00～17：10

会場：黒田記念館セミナー室 オンライン併用（Zoom、ウェビナー形式）

黒田記念館の場所については、下記の URL をご参照ください。

<https://maps.app.goo.gl/nwFbF87okMG93TF27>

開催方式：対面（定員 30 名）／オンライン（Zoom、ウェビナー形式）のハイブリッド開催（いずれも事前申込制、参加費無料）

主催：東京文化財研究所

プログラム：

13:00～13:10 開会挨拶 齊藤孝正（東京文化財研究所長）

13:10～13:50 基調講演 黒田清輝の画業について——神津港人の視点から
塩谷純（東京文化財研究所上席研究員）

13:50～14:30 発表 1 黒田清輝とラファエル・コラン——いくつかの視点をめぐって
三谷理華氏（女子美術大学教授）

14:30～14:40 休憩

14:40～15:20 発表 2 黒田清輝以降——昭和期における「官展アカデミズム」の諸相
高山百合氏（福岡県立美術館学芸課副長）

15:20～16:00 発表 3 黒田清輝からの学びと地方への伝播——鳥取県出身者の場合
友岡真秀氏（鳥取県立博物館主任学芸員）

16:00～16:10 休憩

16:10～17:00 ディスカッション

17:00～17:10 閉会挨拶 江村知子（東京文化財研究所文化財情報資料部長）

発表要旨：

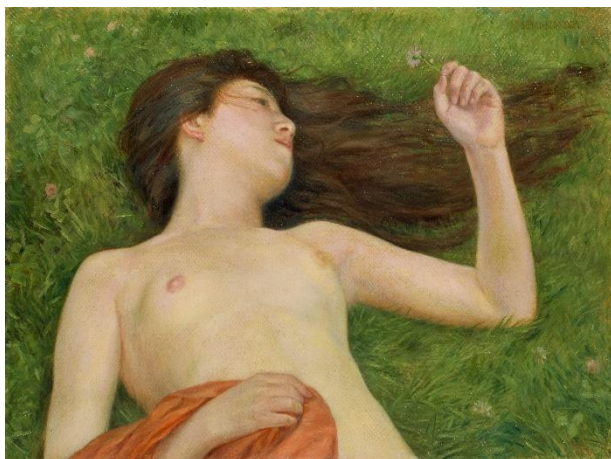
〔基調講演〕黒田清輝の画業について——神津港人の視点から
塩谷 純（東京文化財研究所上席研究員）

「スケッチ以上に進みたい」と語り、西洋美術のアカデミズムに基づく入念な絵画制作を説いた黒田清輝。しかしその作品や言動からは、「スケッチ」的な表現への執着もうかがえる。こうした黒田の画業の揺らぎについて、東京美術学校で黒田に師事した洋画家、神津港人（1889-1978）の視点を介して考えてみたい。

〔発表1〕 黒田清輝とラファエル・コラン——いくつかの視点をめぐって

三谷 理華（女子美術大学教授）

法律を学びに渡仏した黒田清輝が、アカデミズムの画家ラファエル・コラン（1850-1916）という師との巡り会いにより、美術の世界へと進路の舵を切り、洋画家としての才能を開花させたことは広く知られるところである。本発表では、黒田とコランの関係性をいくつかの具体的視点から考察し、師弟の絆の源泉や師と向き合う中で黒田が見出したものなどについて探究を試み、日仏二人の画家の特徴を再考する一助としてみたい。



黒田清輝《野辺》 1907（明治40）年 ポーラ美術館蔵

〔発表2〕 黒田清輝以降——昭和期における「官展アカデミズム」の諸相

高山 百合（福岡県立美術館学芸課副長）

明治40年の文展開設以降に確立され、近代日本洋画史において功罪含めてつねに大きな影響力を持ち続けた「官展アカデミズム」。本発表では、黒田清輝に始まる官展の直系にあたる中村研一や中澤弘光らを中心にしながら、黒田清輝以降の洋画に通底する重要な問題であり続けた「理想画」という概念が、どのように解釈され、作品のなかに表れていたのか、そしてさらには戦前から戦後へと連続性をもって継承されていったのかということを検討したい。

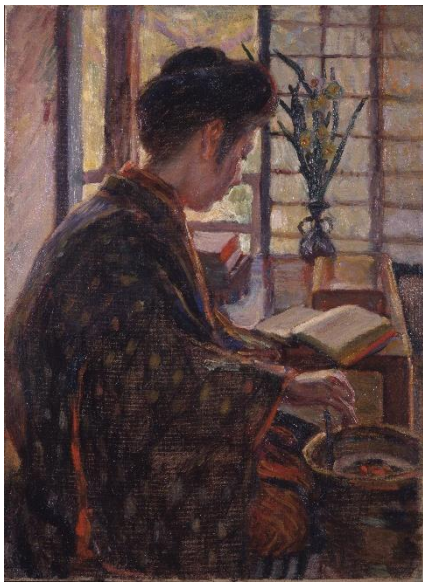


中村研一《弟妹集う》 1930（昭和5）年 住友クラブ蔵

〔発表3〕 黒田清輝からの学びと地方への伝播——鳥取県出身者の場合

友岡 真秀（鳥取県立博物館主任学芸員）

黒田清輝が東京美術学校西洋画科で教鞭を執った時期に同校で直接的にも間接的にもその指導にあずかった地方出身者は、その後往々にして、帰郷先あるいは移住した他地域で、地方洋画壇を率いる存在としてその振興に尽力している。本発表では、中井金三（1883-1969）や安岡信義（1888-1933）ら鳥取県出身の画家を例として、黒田らが西洋から移植した美術教育、ならびにその新しい絵画様式が地方へ伝播していく諸相の一端を検討する。



安岡信義《火鉢（冬の読書）》 制作年不明 鳥取県立博物館蔵

問い合わせ先：

東京文化財研究所 文化財情報資料部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43

e-mail : kjkenkyukai_tobunken@nich.go.jp